

JR東労組 大宮

2022年11月1日 号外

〒330-0853 埼玉県さいたま市大宮区錦町630
電話 048-643-6655 FAX 048-631-1441
JR TEL 054-5844・5 JR FAX 054-5846
email: omiya-chihon@jreu-omiya.jp
発行人 川澄 新一 編集人 矢野 雅之



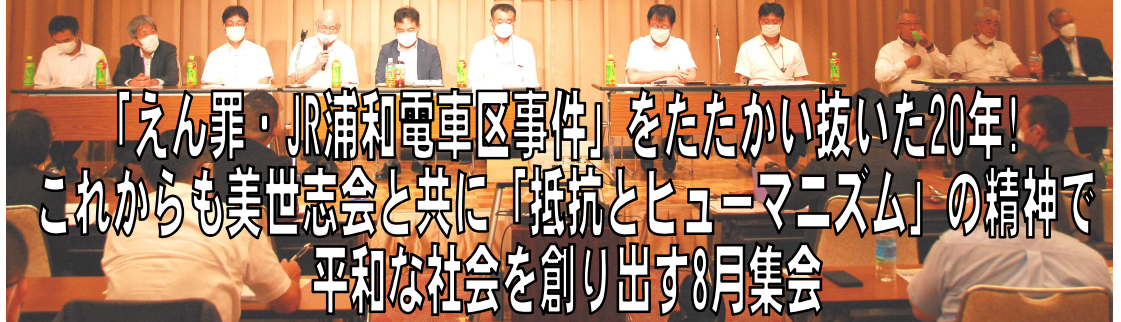
JR東労組大宮地本の
ホームページは
←こちらからアクセス

東日本旅客鉄道労働組合 大宮地方本部

2022年8月28日
さいたま市文化センター



挨拶・パネルディスカッション要旨
※この号に掲載している挨拶・発言は内容等に影響のない範囲で加筆・修正をしています。



主催者あいさつ(挨拶)

大宮地本・川澄執行委員長



私たちは反弾圧のたたかいを美世志会と共に20年間たたかいてきました。本集会ですっかりと総括し今後につなげていきます。

オープニングで小黒さんの「有罪より懲戒解雇の方が厳しい」との言葉がありました。私たちは美世志会に対し不当にも懲戒解雇を行った会社の姿勢を絶対に許さないという想いで8月に職場集会を行うことにこだわり、毎年開催してきました。会社は第一審判決のみで労働者への死刑判決とも言える懲戒解雇を突き付け、私たちは「会社は働く者を守らない」という現実を目の当たりにしました。そして、それまで会社に対して持っていた幻想や理想と対決してきました。

「えん罪・浦電事件」以降に入社し当時のたたかいを経験していない人も増える中で、改めて浦電事件の狙いと本質を明確にし、今もそのような会社姿勢の下攻撃が激しさを増している中に私たちはいます。現在大宮地本は申3号緊急申し入れで転勤を巡る不当な扱いについて議論していますが、交渉の中で本部・本社間で確認した事項が守られていないことが明らかにになりました。また、会社は団体交渉に際し、私たちが求める人を入れず、「責任を持って答えられる」としていましたが、結果として回答できませんでした。このような姿勢は不当労働行為です。そして、不当な異動の結果とし

て3名の病欠と11件もの苦情処理が発生し、会社施策の失敗が明らかになっています。「異動は希望通りに行かない」と会社は述べますが、「そもそも私の希望を知っているのか？」と現場長に迫れば、急いでファイルを取りに行き、それを見て答えるという状況です。何も把握していないのに希望が通らないとはどういう事なのでしょう。か。決まったことに従え」という姿勢が強くなっています。このような姿勢に対し団体交渉でたたかっていますが、その中で課題として明らかにしたのは、このような会社に対し、「希望を叶えてくれるのではない」「印象を悪くすると希望が通らなくなるのではない」という思いがあるのも現実です。

「えん罪・浦電事件」のたたかいでは、このような現実と会社への幻想に対して向き合い、たたかたことを捉え返すべきです。そして、会社姿勢を許さないということは、私たちが日々職場で直面する問題とたたかうということです。8月集会の意義を明確にし、このような会社姿勢を絶対に許さず、会社への幻想や理想と対決するたたかいを創り出しましょう。

そして、もう1つ忘れてはいけない事は当時の組織問題です。浦電事件発生の前日、当時の副委員長を中心としたグループが組織破壊を行いました。その翌日に浦電事件が起きたことの意味を考えなくてはなりません。『仇花と崇高な心』という著作の中で、松崎さんは自己反省を含めて、浦電事件と組織破壊者の逃亡が繋がっていることは、「まさか」という疑念が当初強かったと述べています。しかし、翌年2月の大宮地本の定期委員会で、職場でたたかう仲間の発

言を聞き、労働者の感性に触れ疑念が吹き飛んだと述べています。職場の実践によりたたかいが常に創り出されるといふ事を改めて実感しています。

私たちは18春闘の失敗を反省し、克服に向けて取り組んでいます。浦電事件当時の組織破壊者たちは「自分を作っても組織は作らない」という事を指摘されていたようですが、同じ状況を18春闘でも創り出してしまったのではないかと痛感します。そして以降分裂していった人たちは「自分にならない者は排除する」という姿勢でした。そのような反省も踏まえて私たち自らの質とも対決し、組織拡大に向けて取り組みます。

「平和運動なんて生意気だ」という取り調べでの言葉に明らかのように、浦電事件は平和運動への弾圧であることは明白です。そして、いまその平和が非常に危険な状態になっています。ウクライナでは未だに罪のない多くの命が奪われています。武器では絶対に平和は創り出せないことを明確にして平和運動を創り出さなくてはなりません。戦争を知らない世代が増える中で次の戦争が準備されることは歴史的に明らかです。そして、物価上昇がさらに進みます。この行き詰まりを見せる資本主義の状況を突破するには戦争が不可避だということも歴史から見れば明らかです。このような現実を明確にしつつ、私たちは仲間と連帯して東労組と憲法9条を守り抜き「だまされず・あきらめず・仲間と共に」運動を創り出していきます。

今後も美世志会と共にたたかう全ての仲間と連帯してたたかい抜く大宮地本を創り出す事を決意し、あいさつとします。

パネルディスカッション(抜粋)

公安による「家宅捜索」

大宮地本・山口書記長(当時)



浦電事件は突然の家宅捜索・ガサ入れから始まった。当時地本にいたが八ツ田さん宅や上原さん宅にガサが入った等の連絡が次々と

入った。これは大変だとあちこちに連絡をした。当時副委員長だった長谷川さんに廊下から「書記長ガサだよガサ」と言われた。いきなり公安警察が入ってきて「何ですか」と聞いたら「ガサです」と彼らは言った。私も何が起きたのかわからず、とにかく阻止をしなくてはいけないと思い、色々やり取りをしたが「公務執行妨害になりますよ」と言われ、正直ビビって中に入れた。捜索令状には、ありとあらゆる物を持っていかせるようなあった。とにかく何も持っていけるなどの思いで「抗議します」と言った。「なぜそれを持っていくのか?」と聞いたら「AとかBとか矢印とか記号が書いてある。これが不審です」と言い、地本にある文書

は何でも持つて行くのかと思ひ、阻止するたかいかいを中で続けた。しかし外の状況も分からず、中の状況も伝えなければならぬ。伝えるタイミングはトイレしかないと思ひ、行くときに「あれを持つていかれた、これを持つていかれた」と大きい声で話しながらトイレへ行くが、付いてきた公安になだめられた。外の状況がわからないうちに「山田が逮捕された」「梁次が逮捕された」と情報が入り、何が起きているのかさっぱりわからない状況で事態だけが進んだ。10時間に及ぶ家宅捜索が終わる、その後本部へ行き弁護士の方々と今後どうするか打合せをした。しかし7名の仲間が逮捕され拘留され、家族や職場を守らなければならぬ想いを強くし、改めてたたく決意をして浦電事件の反断圧のたたかいが始まった。

理由もわからず突然の逮捕

大宮地本・梁次副委員長(当時)



いきなりだった。当時専従をやっていたが、Yはあまり知らない。会ったのは1・2回で「なぜ俺が捕まるのか?」と驚いた。捜索

は2時間くらいやられた。勝手に辞めていった奴による事件だと思ひ、最後出るときに大きな声で「Yのでつち上げだ」

と叫んだ。その時は外は晴れていたで「秋晴れや「ワッパ」はめられ貝になる」と、緘黙(かんもく)でいこうと決意した。出てきたときは満月だったので「満月や「ワッパ」外れて酒飲むぞ」と喜びを語ったのをよく覚えている。

浦和支部にも家宅捜索が入る

浦和支部・佐藤佳成さん



朝8時に起こったが、どこも一緒だったと思う。尋常じゃない位支部のドアをたたかれて、もう一人と「近所で火事か泥棒かと

何かあつて警察が来た」位しか思わなかった。軽いたたき方ではなく、「中にいるのはわかっている、出てこい!」みたいにずつと叩かれ、出たら赤と黒のチョッキを着た公安が12・3名くらい一気に押し込み、狭い玄関を一心に入ってきた。特徴的だったのが「あなたはYをご存じです」と言う所から始まった。Yと出た時点で何か動いたなと感じたが、まさかこんな大事になるとは思わなかった。山口さんと同じですべて連絡は遮断された。電話も何もかけられず、鳴つても取れず周りの状況が一切わからない。まずは身体検査が始まり、隠せるものは何もない位に全部調べられた。カバンの中から財布の中にあるメモや紙切れ・レシートま

で全部チェックされた。その辺から恐ろしいと感じた。あとは事務所内を全部調べ、Yという文字や、組織破壊・集約・集会という文字とかを見つけると手が止まり、写真を撮り押収した。金庫が開かず家宅捜索の終了時間が遅くなった事を覚えている。全てが遮断された中で行なわれ恐怖であつた。いつガサが終わり帰れるのかわからなかった。

職場にまで来て緊急執行の逮捕

浦和電車区分会・大淵さん



アパートで寝ていた朝の7時過ぎにやたらと玄関のドアを叩かれた。尋常じゃない叩き方だったので始めはいたずらかと思つた。だんだん激しくなり、半分恐怖感があつたがそのうち止むと思ひ、いないふ

りをしてた。30分程たち急にシーンとして、不安だったがあつたら誰もいなかった。当時CS会議の会長をやつていて、毎月1回行つてた乗務員の安全集会を当日行うため、会長として少し早めに家を出て職場で段取りをしようと思つてた。職場に行き、本館2階の乗務員室手前のトイレの前で2人の私服刑事が

「お前は大淵か」と聞き「大淵だ」と言ったら「逮捕状が出ている」と言われた。色々押し問答しながら当直の所に行ったら山本君に「逮捕状が出ているらしいぞ」と言われ、「トイレぐらい行かせろ」とトイレに行き落ち着いた。押し問答にはなつたが逮捕状は無かった。実際は東京の警視庁での取り調べの前に「これが逮捕状だ」と示された。私の場合は緊急執行だったが、職場から東京拘置所に行った。自分の経験として、みなさんに言いたいのは「始めが肝心」という事。その後警視庁での初めての取り調べで、向こうの取調官が犯罪事実を聞く事と同時に弁護人選任権の告知を行った。



家族会の結成

浦和電車区分会・今井さん

混乱している中、家族の分断も図られていたので職場でもしっかりと家族のフォローをしようと常駐体制を敷いた。家族のフォローのために誕生日やクリスマス会などを開催した。しかし男性だけで家族



のフォローを行うのは限界があると思ひ、家族会を結成した。どのように創るか試行錯誤だったが、広域異動で来た先輩方の奥さんにも手伝ってもらった。また分会役員の奥さんにも手伝ってもらった。連絡網も作り、拘置所に行き、傍聴券獲得行動に参加してもらい、裁判の傍聴にも入って頂き、色々な経験をしてもらった。行動する事を通じて家族にも理解してもらえた。

職場から仲間を支えるたたかい

多くの職場から語られる！



◆本社幹部が職場に入り「安全キャバン」と称し、安全の事は一切語らず不当懲戒解雇撤回署名に対し弾圧

してきた。都労委の申し立てを行った。見送り行動やレクを開催し団結を強めた。実害がないという事で不当にも棄却されたが、即日控訴し、中労委でのたたかいを継続した。理不尽なことに対して対権力であっても仲間を守るためにたたかうという「抵抗とヒューマニズム」を体現してきた。都労委のたたかいを担ってきた。

た当時の青年部は東労組の中心的人物になつていく。

◆大宮駅西口の鐘塚公園に入りきらない位の人が集まったことを思い出す。当時の宮総支部執行部は会社に対して懲戒解雇に抗議行動すら起こせなかったが、支部青年部を中心に会社に対抗行動を行った。懲戒解雇を許してはならないという想いの一方、会社に向かうのは怖かった。しかし仲間と一緒にたたかったからこそ会社への抗議に一歩踏み出すことが出来た。そのたたかひを見ていた一部の支部執行部も「仲間が首を切られているのに支部は何もしないのか！」と奮起し、宮総支部から11・29集会を進めた。集会やデモに結集した多くの仲間が共に声を上げ、会社の酷さを街頭に訴えて仲間と意志統一することが出来た。

◆当時「美世志会の立場に立つて」と考えたたたかひを創り出したが、ある集会で「逮捕され解雇されて、美世志会と同じ立場になれる訳がない」との言葉を聞いた。自分には何が出来るかを考え行動に示すように変えたことを覚えている。美世志会が当時から今まで守ってきたものが、組織であり仲間であり職場である。自分も美世志会が行ってきた事を同じ立場に立つて守っている。職場で8月集会を創る事にこだわった理由は、「当たり前前の職場活動」が犯罪にでつち上げられたから。職場活動を堂々と行う事は、美世志会の無実を証明し続ける事であり、これからの職場活動を通じて美世

志会の無実を証明し続ける。これからも分会は全員で運動を展開していく。

◆この事件は職場活動の否定であり東労組破壊である。その目的に抗し、風化させないために8月に職場で集会を続けている。しかしコロナ禍の状況でどのように集会を開催していくかみなで悩んだ。集会にこだわらず8月に美世志会や浦電事件の話をしていく事を一致させ開催している。同時に職場問題についても組合員と話している。多くの施策が行われる中で組合員から諦め感も出てくるが、職場を良くしていく事は職場のたたかひでしか出来ない。私たちが目指すものを一緒に創る集会にしていく。

美世志会代表あいさつ(抜粋)

美世志会・上原前代表



取り調べで言われた「労働組合が平和運動を行うのは生意気だ」の言葉が本質

だと思っている。平和運動をまじめに取り組む労働組合はJR総連・東労組しかない状況下で仕掛けられた事件である。7月10日の参議院選挙の結果を見てみれば、改憲勢力が3分の2以上になり、ウクライナへの軍事侵攻も行われている。防衛費の2%越えや核保有まで言い出

し、鉄道貨物による軍事輸送を進めようとしている状況下で、真の平和を守るにはJR総連・東労組しかないと思っている。そんな労働組合を潰すため、国家権力は攻撃を仕掛けてきたし、それに同調してJR東日本会社も東労組の組合活動を破壊するために権力と共にやってきた事が私たちの攻撃である。この20年前にみなさんのたたかいによって壊せなかった組織を会社は見て、ジョブローテーションや柔軟な働き方、組織再編などの施策を活用しながら、労務管理を強化し東労組破壊をしていると思わざるを得ない。しかしただ反対するだけでは組合員の利益は守れない。組合員のみなさんと共に様々な施策に対し見詰め、たたかいを創り上げないといけない。そして未加入者も含めてたたかいの大きな柱を訴え、組織強化・再加入を目指すなどとならない。20年のたたかいを創ってきた大宮地本のたたかいの成果と教訓をさらに広め、みなさんと共に反弾圧のたたかいを進めていかななくてはならない。改めてこの20年間大宮地本と共にたたかいを進めてきたすべての仲間、皆さんにお礼を申し上げると共に、これから東労組運動の前進に向けてたたかう決意を申し上げて挨拶とします。

※今集会で、新しく美世志会の代表となった山田新代表の挨拶は、『JR東労組大宮』261号（9月11日発行）を（覧下さい）。

集会のまとめ（抜粋）

大宮地本・唐紙書記長



大宮地本は「えん罪・浦和電車区事件」から20年を迎えるにあたり、この浦電事件をどの様に職場で語り継ぎ、そしてこの先のたたかいに生かしていくのかを考えてきました。地本は8月31日の不当懲戒解雇の怒りから職場のたたかいを創り出してきました。20年を超える節目として集会を創ろうと議論し実行委員会を立ち上げ、支部と分会と共にこの集会を創り上げることが出来ました。

パネルディスカッションを行うにあたり、美世志会の方々と打ち合わせをしながらどういったものを創ろうかと様々な意見を出し合ってきました。20年間のたたかいなので色々な想いがあり、議論を深めるため美世志会の仲間はもちろんのこと、当時の地本書記長や分会長の方たちにも登壇して頂きました。当時の美世志会の想いや分会の想いを出し合えて、素晴らしいパネルディスカッションになりました。

美世志会の上原さんからは「大宮の事務所はいつも多くの仲間がいる」と言われます。なぜなのか。私たちは国家権力からの大弾圧を経験し、国家や権力と

は何か、警察や裁判所は労働者にとってどういう存在なのかという事を肌で感じてきました。当時私も大宮支部で役員を担っていましたが、非常に怖く不安にもなり、この先どうなってしまうのかとも考えました。しかし、それ以上に悔しい想いをしたのは美世志会であり、家族だという事に想い巡らせ、恐怖や不安を乗り越えてきました。多くの仲間が権力の本当の姿を学び、屈するわけにはいかないという事を感じ、地本や支部・分会の役員を担っています。大宮地本の団結力の源は、美世志会の仲間と共にたたかい抜いてきたものだと感じています。

今集会では平和の取り組みが非常に重要ではないかと意見が出されました。組織人数が減少し、労働組合が政治活動や平和活動を担うことに対し批判的な声があり、「やるべきではない」という声も正直ありました。今の状況では厳しいのではないかと尻込みをした部分もありました。しかし、労働組合・労働者にとつてそれでよいのかという事で、ウクライナ避難民支援カンパ等を行い、平和について議論を進めています。今の社会情勢を見ると、一気に憲法9条を改正して戦争に突き進んでいくのは間違いありません。そこで犠牲になるのは労働者であり、私たち鉄道労働者にとつて非常に大きな問題になってくる事は間違いありません。改めて大宮地本として、秋のたたかいの中で平和を守る取り組みを創っていきます。具体的には9条連の会員拡大をしつかり取り組んでいく事を提起して

います。平和を守る取り組みや9条を守る取り組みに向き合っていきます。

最後に集会名称を「えん罪・JR浦和電車区事件をたたかい抜いた20年、これからも美世志会と共に抵抗とヒューマンズムの精神で平和な社会を創り出す8月集会」とさせて頂きました。この集会名称を決めるにあたり、私たちにとつての20年は何だったのか、そしてこの先どうしていくのかという想いをこの集会の名称にしていく事としました。大宮地本はこれからも美世志会と家族と共に歩んでいき、人間らしく生きていくために権力に屈せず、会社に対しても問題が発生した時にしっかりと向き合い、職場からたたかい、組合員のための運動をしつかり推し進めていきます。



また、来年以降大宮地本として8月に平和集会を継続的に開催していきたいと考えています。その中で浦電事件のたたかいを引き継いでいく事と、平和運動を継続して創っていきたいと思います。今後、支部・分会と議論していきますのでよろしくお願ひ致します。最後に感謝を申し述べてまとめとさせていただきます。